The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	東南アジアのラーマーヤナ(5) : スンダ語版『バタラ・ラマ』
Author(s)	大野, 徹
Citation	大阪外国語大学アジア太平洋論叢. 1998, 8, p. 209-234
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99915
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

東南アジアのラーマーヤナ（5）

――スンダ語版『バタラ・ラマ』――

大　野　　徹*

はじめに

最近、筆者はインドネシアに伝わるジャワ語以外のラーマ物語として、スンダ語版のラーマーヤナがある事を知った[1]。スンダ語版ラーマ物語の題名は「バタラ・ラマ」と言い、マルタナガラによって1935年にバタビアで刊行されている[2]。題名のバタラとは神を指し、ラマとはスンダ語、インドネシア語でラーマの事を指す。元来、芝居として上演されていた物語を書き記したものであるために全体が韻文で、詩の形式によって，全編が Midjil, Dangdanggoela, Pangkoer, Asmarandana, Sinom, Kinanti, Doerma, Maskoemambang, Magatroe 等、6行詩（Macapat）の各項目に逐一分けられているのが特徴である。

スンダ語版ラーマ物語『バタラ・ラマ』に関する紹介は、邦文でも英文でも今のところ見当らない。そこで、本稿ではスンダ語版ラーマ物語「バタラ・ラマ」の概要を紹介し、スンダ語で書かれたラーマーヤナにはどの様な特徴があるのかと言う事を、ラーマーヤナ研究の観点から明らかにする。原本では、スンダ語の詩の形式に応じてミジル、パンクル、シノム等の小見出しが各部毎に添付されているが、スンダ語版ラーマ物語の内容の紹介を旨とする本稿ではそれらの小見出しは省略する。

1　バタラ・ラマの概要

*大阪外国語大学　地域文化学科　アジアⅡ講座

第1部　ラマ・ムダル

人間も、神々も、ラフワナ（Rahwana）を恐れている。なぜなら、天界（Soeralaja）の帝王であるインドラ神（Batarendra）でさえ、ラフワナに敗北したからである。ラフワナは怒ると、その超能力のせいで顔が10個にふえる。そのため、ダサムカ（Dasamoeka）という別名で呼ばれる事もある。

ダサムカの父親は、天界（ロカパラ・ナグリ）の聖者（マハ・ラシ）ウィスラワである。ウィスラワとンガルンカ（Ngalengka Poeri）国の羅刹王ソマリ（Somali）の娘デウィ・スケシ（Dewi Soekesih）との間に、ダサムカ、クムバカルナ（Koembakarna）、サルパカナカ（Sarpakanaka）、ウィビサナ（Wibisana）と言う4人の子供が生まれた。初めの3人は羅刹で、最後の一人は人間である。サルパカナカにはカラドゥサナ（Karadouesana）と言う夫がおり、ンガルンカ国の摂政（Boepati）に任じられている。

ンガヨジャ（Ngajodya）国のダサラタ王（Praboe Dasarata～Dasarati）には、デウィ・ラグ（Dewi Ragoe）、デウィ・クケジ（Dewi Kekeji）、デウィ・スミトラ（Dewi Soemitra）と言う3人の妃がいるが、子宝には恵まれない。王は、行者ワシスタ（Wasista）を通じてシヴァ神（Sanghyang Otipati）に、男児，それもヴィシュヌ（Batara Wisnoe）の血を引く児童の出産を祈願する。その結果、妃3人がそれぞれ王子を出産する。デウィ・ラグが生んだ子には、シナトリア・ラマバドラ（Sinatria Ramabadra）、デウィ・クケジが生んだ子にはラデン・ブラタ（Raden Brata）、デウィ・スミトラが生んだ子には、ラハデン・ラスマナ（Rahaden Lasmana）とラハデン・トルグナ（Rahaden Troegna）と命名される。4人は様々な学問を身に付けながら成長する。

ある日、ンガヨジャ国にヨギスタラ、ミントラと言う二人の行者が現われ、自分達の修行がンガルンカ国の羅刹に妨害され困り果てている。羅刹の妨害を排除してほしいとダサラタ王に申し出る。申し出を受け入れたラマバドラとラスマナの2兄弟が行者に同行する。

行者達の修行を妨げていたのはダサムカ王の友人であるタタカキヤ（Tatakakya）とその武将マリチャ（Maritja）である。ラマバドラ、ラスマナの二人の攻撃を受けたマリチャが抗議する。君達は、なぜ何の罪もない我々羅刹

を殺すのか。ラマバドラが答える。私はダサラタ王の子。神々の帝王に依頼されて汝等を征伐に来た。戦闘が始まる。ラマバドラはアルダチョンドラ(Ardatjondra)[3] を使用する。矢の威力でマリチャは空中遠くへと吹き飛ばされる。それを見ていた天界の神々は拍手喝さいする。

帰国したラマバドラ、ラスマナの二人に、ダサラタ王が言う。マンティリ(Mantili) 国の国王ジャナカ (Praboe Djanaka) が姫君 (Koesoemah Poetri Mantili) の婿選びを挙行する。婿選びは先祖伝来の弓ヒャン・ジャガトナタ(Hyang Djagatnata) と言う弓を射る事である。二人ともその試合に参加するように。試合に勝てばマンティリ国の姫君と結婚できる。それが実現できるのはそなただけだとダサラタ王はラマバドラに言う。

ラマバドラ兄弟はマンティリ国へと赴く。多勢の人々が集まっている。しかし、誰も課題の弓を持上げる事ができない。ラマバドラ兄弟が現われる。二人を見た人々は、その美貌振りに、二人は愛の神 (Sang Hyang Kamadjaya) とキューピット (Hyang Asmara) の化身ではないかと口々に語り合う。ラマバドラが弓を持上げる。弓はしなやかになり、U字形に折れ曲がる。人々は拍手喝采する。姫の結婚相手が決って、ジャナカ王は喜ぶ。そなたはどこのどなたかと尋ねる。私はンガヨジャパラ (Ngajodyapara) のダサラタ王 (Praboe Dasarati) の王子だとラマバドラは答える。使節が派遣され、ダサラタ王が結婚式に招かれる。王は軍隊を率いて出席する。

結婚式を挙げたラマバドラ夫妻一行は帰国の途に着く。途中、ジャマダグニ(Sang Djamadagni) すなわちラマブルガワ (Ramabergawa) と遭遇する。ラマブルガワはラマバドラに持参している弓を引くよう要求する。見事引ければ汝の勝ちだが、引けなければ汝の負けになると言う。ダサラタ王が懇願する。ラマブルガワはまだ幼い。何もできない。どうか見逃してほしい。しかし、ラマブルガワは承知しない。ラマバドラが要求に応じて弓を引く。ラマブルガワは己の敗北を認める。

帰国したダサラタ王は、ラマバドラに王位を譲る旨告げる。しかし、ダサラタはかつてデウィ・クケジの子供を王位に就けると言う約束をクケジにしていた。王はその約束を忘れていた。

ラマバドラに王位を譲ると言うダサラタ王の言葉を聞いたクケジ妃は、王に抗議する。王は私の子ブラタを王に即位させると儀式の時に約束した。その約束を忘れたのか。ラマバドラは森なり山なりどこかへ行かせるべきだと要求する。ラマバドラは、妻デウィ・シンタ、弟ラデン・ラスマナを伴ってンガヨジヤ国を去り森に入る[4]。ラマバドラ一行3人の出国を苦にしたダサラタ王は病の床に伏せ、この世を去る。ラデン・ブラタは母の仕打ちを知ってその非を詰る。ブラタ王子はラマバドラを森に尋ねる。帰郷して国王に即位するよう要請する。弟の要請をラマバドラは断わる。ラマバドラは弟ブラタに優れた王となるための心構えを説く。

ラマバドラの話を聞いたラデン・ブラタはンガヨジャへと戻る。ラマバドラ、シンタ、ラスマナの3人はダンダカの森へ向う。その山には羅刹ウィラダがいる。ウィラダは、逆立ちをして歩く。頭を下にし両手で大地を支える。ウィラダとラマバドラとの間で戦いが起こる。ウィラダ敗北する。

ラマバドラは聖者バガワン・スティスナ・ヨギ（Bagawan Soetisna Jogi）から様々な教えを受ける。聖者は持っている知識すべてをラマバドラに授ける。ラマバドラ一行は各地を放浪しながら、ダンダカの森に到着する。ここは羅刹が出没する森である。

ダンダカの森にはサルパカナカ（Sang Dewi Sarpakanaka）がいる。サルパカナカはンガランカ国王ダサムカの妹である。彼女は森の中でラマバドラ一行を目撃する。美丈夫のラスマナに恋心を覚えたサルパカナカは、美女に変身して接近し、自分と夫婦になってくれと迫る。ラスマナはその口説きを拒否する。自分は結婚しないと誓っている。夫が欲しければラマバドラにそう言うようにと告げる。ラマバドラも、サルパカナカの要求を断わる。自分には、デウィ・シンタと言う妻が既にいる。そなたを妻にはできない。サルパカナカは恥をかかされたとラスマナに怒る。怒ったサルパカナカの顔を見たラスマナは、サルパカナカが人間ではなく羅刹（raseksi）である事を知って足蹴にし、鼻を捩じり取る。

ラスマナに痛めつけられたサルパカナカは、自分の夫二人すなわちカラドゥサナ（Karadoesana）とトリムルダ（Trimoerda）に、自分はラスマナに手込めにされかけたと訴える。ラスマナとカラドゥサナ、トリムルダとの間に戦いが起こ

る。ラマバドラもラスマナに助勢する。羅刹は全員、ラマ兄弟に殺される。

ダサムカはアルンカ国を支配する羅刹王である。彼の本名は、ラフワナ（Rahwana）と言う。彼は、ロカパラ[5]の国王ウィスラワ・ナルパティとアルンカ国の羅刹王ソマリ（Somari）の娘スケシ（Soekesih）との間に生れた。スケシには、子供が4人生れた。ダサムカ、クンバカルナ、サルパカナカ、ウィビサナの4人である。4人の子供の内、前3人は羅刹（Boeta）だが、末子のみは人間（Manoesa）として生れる。クンバカルナは巨体の持主である。ウィビサナは善人の心を持っている。兄ダサムカの前に現れたサルパカナカは、泣きながら夫二人の死を告げる。自分の夫は、二人共何の罪も無いのに、ラマバドラ、ラスマナと言う人間二人に殺された。羅刹が多勢、二人に殺された。ラマ、ラスマナに理由なく殺された。訴えを聞いたダサムカ、激怒する。直ちに、ダンダカの森へ行こうとする。ダサムカは、マリチャに応援を求める。マリチャはかつて聖者たちの修行を邪魔してラマバドラの制裁を受けた事がある。マリチャはラマバドラの比類なき威力を説明する。昔、マエスパティ国王アルジュナ・サスラバフとラマブルガワとが決闘をし、サスラバフが負けて死んだ。サスラバフは勇猛な国王に生れ変わる事を望んでラマバドラとなり、マンティリ王国先祖伝来の矢を見事に引いた。とても叶わない。ダサムカ、怒る。マリチャが述べる。ラマバドラ一行に立向うには策略が必要だ。ダサムカが尋ねる。どの様な方法がよいか。マリチャは答える。自分が鹿に変身する。金色の鹿に。そして、ラマバドラとラスマナとをシンタから引き離す。一人残されたシンタをダサムカが誘拐すればよい。

ダンダカの森に現れたマリチャは、金色の鹿に変身する。それを見たシンタ、鹿を欲しがる。ラマバドラ、制止するが、シンタは聴かない。鹿を捕えてほしいとラマバドラにせがむ。ラマバドラ、弟ラスマナにシンタの警護を依頼して、鹿を追跡する。

ラマバドラ、鹿に矢を射る。鹿は断末魔の悲鳴を挙げる。悲鳴はラマバドラの声を模倣したものであった。ラマバドラの身の上に異変が起きたとシンタは心配する。直ちに助勢に向うよう、ラスマナに依頼する。ラスマナ、動かない。自分はシンタを警護するよう兄に指示されている。ここを動くわけにはいかない。シンタ、怒り出す。あなたは、ラマバドラが死ねばよいと思っているのでしょう。

ラマバドラが死ねば、私と結婚できるから。ラマバドラが死ねば、私も後を追って死にます。あなたの妻になど絶対になりません。思いも寄らぬシンタの言葉に、ラスマナは泣きながらシンタの側を離れる。

一人残されたシンタの前にダサムカが現れる。彼は、年取った行者の姿に扮している。水を入れた瓢箪を肩に担ぎ、よろよろ歩いてくる。シンタの姿を見たダサムカは言う。そなたは美しい。今までそなたのような美しい女性を見た事はない。そなたは、カマジャヤの妃デウィ・ラティか、それともバタラ・ブラフマの妃ララサティか。シンタが答える。私は、ンガヨジャ国の王子ラマウィジャヤの妻。ラマウィジャヤは、羅刹に苦しめられていた行者を助け、多勢の羅刹を殺した。ラマウィジャヤは本来ンガヨジャ国の王になる筈であったが、弟ブラタが王になった。ダサムカが言う。私が知っている限りでは、ラマウィジャヤはよくない。悪い奴だ。だから、ダサラタ王も、ブラタを後継者に選んだのだ。バラタとトルグナは善人だと褒める。ダサムカ、本性を現わし、シンタを輿に乗せて誘拐する。

空中から悲鳴が聞える。女の悲鳴である。「ラマ、ラマ、私を助けに来ておくれ、私は、ダサムカに誘拐されている」「ラスマナよ、私を許しておくれ。そなたを疑った私が悪かった」。悲鳴を聴いたガルーダ (Galoedra) のジャタユ (Sang Djatajoe) が駆け付ける。「待て。男なら尋常に勝負しろ」。ジャタユとダサムカの間で戦いが起こる。ジャタユはダサムカを嘴で攻撃する。敗れたダサムカは地上に墜落死する。ジャタユは羅刹に担がれた輿を追跡、嘴で突つく。輿は地上に落下して壊れる。ジャタユはシンタを受け止めて助ける。

しかし、地上に墜落して死んだダサムカは、生き返る。彼は、死んでも地上に落ちれば蘇生するのである。ダサムカは、たとえ百回死んでも百回生き返る不死身と、重傷を負っても健康体に復帰する超能力を保証されている。ジャタユはその事を知らない。ダサムカはジャタユの背後に回り、剣 (Tjandrasana)[6] で切りつける。ジャタユは翼を切断されて落下、瀕死の重傷を負う。

ダサムカはシンタを輿に乗せてアルンカ国に拉致する。サン・スデウィの庭園に幽閉する。デウィ・トリジャタはウィビサナの娘で、ダサムカの養女である。ダサムカはデウィ・トリジャタにシンタの世話を命じる。シンタの監視に当たる

女羅刹達に、ダサムカは指示する。ラマバドラは、無実の羅刹達を多数殺戮した。極悪非道の人間だ。今やシンタの事などすっかり忘れている。シンタにそう吹き込んで、ラマバドラの事を忘れさせよ。

ダサムカがシンタの部屋を訪れる。しかし、シンタはその入室を拒む。ラマと再会できなければ私を殺せとシンタは言う。ダサムカは止むなく立ち去る。

鹿を追跡していたラマバドラはラスマナに会う。急いで元の場所に戻る。シンタの姿が見えない。シンタは一体どこへいったのだろう。花でも摘みに出掛けたのだろうか。ラスマナにラマが言う。私はそなたにシンタの警護を命じた。それなのに、なぜそなたは私の命令に背いて、シンタを一人放置したのか。ラスマナが説明する。ラマの悲鳴が聞えた。心配したシンタが私を助勢に派遣した。私は、あなたの側を離れる事はできないと一旦は断ったが、シンタは、私が彼女と結婚したがっていると邪推して非難した。それで私は彼女の側を離れた。話を聴いたラマは失神する。気を取り戻したラマは弓矢を携えてシンタの捜索に向う。

第2部　ラマ・ガンドルン

シンタが行方不明になったため、ラマウィジャヤは悲嘆に暮れる。慟哭するラマウィジャヤをラスマナが励ます。我々はクシャトリヤだ。強くなければならない。弱気ではいけない。シンタを探そう。二人はシンタ捜索の旅に出る。

途中、切断された翼を発見する。輿の残骸も見付かる。シンタはガルダに拉致されたのではないか。ラマに疑惑が生じる。二人はガルダのジャタユを発見する。ラマはジャタユを殺そうとする。ジャタユが事情を説明する。自分はダサラタ王の友人である。悲鳴が聞えたので駆けつけると、シンタがダサムカに誘拐される所だった。シンタを助け出そうとしたが、失敗した。シンタはダサムカにアレンカプリに拉致された。語り終えたジャタユは、ラマの膝の上で絶命する。二人はジャタユを荼毘に付した後、シンタ捜索に向う。

孔雀を発見する。追いかける。逃げ足が速くて捕まらない。二人は休憩する。羅刹デイルガバフが現われる。デイルガバフは、腕が極端に長い。動物を捕えては餌にしている。デイルガバフとラマとの間に戦闘が始まる。ラマの手で倒されたデイルガバフが、告白する。自分はバタラ・スリ (Batara Sri＝ ラクシュミー)

の子供で、元は天人（Djawata）であった。シヴァ神（Sanhyang Djagatnata）が空中を飛翔中、うっかりその影を踏んだために、怒ったシヴァ神に羅刹に変えられ、天界から放逐された。だから、こうして羅刹の姿で地上にいたのだ。私はあなたの手で殺される事によって救われる。

私は、これから天界へ帰る。お礼に、あなたにお教えしよう。シンタは必ず見つかる。彼女はダサムカに捕えられてアレンカデイルジャにいる。早く救出に向うべし。今はまずラクサムカ（Raksamoeka）山に行く事だ。そこであなたは味方に会う。それは多勢の部下を従えた猿で、名前はスグリワ（Soegriwa）と言う。スグリワはキスケンダ（Kiskenda）国の王だが、今は兄のソバリ（Sobari）に苦しめられる辛い立場にある。兄弟の間で争いが起り、ソバリがキスケンダの王になった。スグリワは妻デウィ・タリ（Dewi Tari）までソバリに奪われた。スグリワは今マヘンドラ（Mahendra）山にいる。反ソバリ派の猿達は、スグリワと一緒に行動している。スグリワには既に神のお告げがあった。ラマバドラが汝を支援し、ソバリを殺してくれる。スグリワは、神のお告げを受け、あなたを探すため部下をラクサムカ山に派遣した。あなたがもしスグリワを応援すれば、スグリワもあなたに協力する。デイルガバフはラマにそう告げて姿を消す。デイルガバフの死体が消え、光が現れる。

ラマとレスマナとは再び出発する。全身真黒な鳥に出会う。名前はサワリ。苦行をしている。鳥でありながら、なぜ苦行をしているのか。不思議だ。鳥が語る。ある時、自分はウィスヌの妃に誘われて散歩していた。私は鳥だから神々のおわす天よりも高く飛ぶ。怒ったシヴァに罰として地上に行くよう命ぜられた。ウィスヌの妃デウィ・スリもジャワタと話をしている時、罰を与えられた。彼女は、地上に降下して豚になった。デウィ・スリは、山にいた。私と一緒の山です。ウィスヌは妃に手紙を寄越し、そなたは地中にいなさいと指示した。スリはその手紙を読んで死んだ。肉体は滅んだが、その魂（Atma）は地中に入った。そして、デウィ・プルティウィ（Dewi Pertiwi）[7] として生れ変った。

ラマにスグリワを助勢するよう依頼して、元の体に戻ったサワリは天界に戻る。旅を続けたラマとレスマナは、マリヤワン（Malijawan）山の北側に到着する。その事実を、スグリワが直感で知る。スグリワは、アノマン（Anoman）に命じ

る。ラマ一行を探しに直ちにマリヤワンに赴くべし。アノマンはラトゥ・マス(Ratoe Mas) とアンジャニ(Dewi Andjani) との間にできた子供である。マリヤワン山に着いたアノマンは、ラマ、レスマナに会って自己紹介をする。その後、二人をマヘンドラ山に案内して来る。猿達、喜ぶ。

ラマ、レスマナ、スグリワの三者、同盟を組む。スグリワがソバリの豪力とその不死身について語る。かつてインドラの象はソバリを見て戦意を失い逃げ出した。また、ソバリは、マエサスラ、ジャタスラと言う二匹の羅刹を殺した事もある。ラマは1本の矢でパルミラ椰子7本を射抜いて見せる。

全員揃ってキスケンダに向う。バリとスグリワの間で戦闘が始まる。互いに押し合い、引き合い、引っ掻き合いする。首を掴まえて投げ倒す。ラマは弓を引くが、ソバリとスグリワの区別がつかない。兄弟二人は酷似していて、どちらがどちらか判別できないのである。このままでは間違ってスグリワを射殺する惧れがある。ラマは両者を識別するため、スグリワの首に植物の葉を巻かせる。戦闘が再開される。ラマはソバリ目掛けてブラフマストラ矢を射る。倒れたソバリがラマを詰る。汝はクシャトリヤの身でありながら、罪のない猿を殺すのか。そういう悪い事をするから、汝は王になれなかった。汝の弟ブラタが王になったのだ。ラマが答える。私は、ダサラタの子で、元ヨジャパラ国の皇子だ。ソバリ繰り返す。私はスグリワと戦っていた。兄弟同士の戦いだった。私には何の罪があったと言うのか。私には何の罪もない。ラマが答える。私は、そなたの事をすべて知っている。そなたはスグリワの妻デウィ・タラ (Dewi Tara) を略奪した。兄弟の妻を奪った。ソバリはラマの顔を見て全てを悟る。ラマバドラは他ならぬウィスヌ神 (Sanhyang Wisnoemoerti) である事を。ソバリは弟スグリワに謝まる。そしてラマに救済してもらいたいと依頼する。ソバリはスグリワに言い残す。ラマの命令に従え。スグリワ、キスケンダの王に即位する。

ソバリには子供がいる。デウィ・タラが生んだ子である。名前はラデン・アンガダ (Raden Anggada)。アンガダはラマの養子になる。ラマは、雨季が明けたら、スグリワと一緒にシンタ捜索を行なう事にする。それまではマリヤワン山で待機する。

ラマは苦行を続ける。絶食して祈祷を続ける。神カネカプトラ (Sanghiang

Kanekapoetra）が天界から降下する。ラマにマオサディラタ（Maos Sadilata）と言う植物の葉を与える。これを植えて育てよ。その葉は、後にそなたがアレンカプリで戦争をする時に必要になる。この葉を当てれば傷は元通りに治るし、一旦死んだ者も甦る特殊な効能がある。ほかの人に見付からないよう隠しておくように。ラマはマオサデイの葉を植える。シンタ捜索の時期を待つ。

アンガダが成長する。ラマは疑問を抱く。スグリワはシンタ捜索のために協力すると約束した。雨季が明けたらシンタ捜索を開始すると言った。それなのに出頭して来ない。なぜ来ないのか。約束を忘れたのか。ラスマナをキスケンダに派遣する。キスケンダに到着したラスマナ、スグリワを同道してラマの所へ戻る。

猿達全員がラマの前に出頭する。スグリワ、ラマに謝罪する。シンタ捜索のため、スグリワは、猿の武将4人アノマン、アンガダ、アニラ（Anila）、ジュンバワン（Jembawan）にアレンカへ行くよう命じる。ラマがアノマンに自分の指環を託す。シンタはそなたが余の使節だと言う事を知らない。シンタに会った時に証拠として見せよ。4人は、アレンカからさほど遠くない所にあるスウエラ（Soewela）山に滞在する。

4人は、マリアワンよりも更に大きな山の上に上る。洞窟がある。4人共、中に入る。途中で女に出会う。美人である。女が言う。私の名前はサジュムプラバ（Sajempraba）。ウィサカルマ（Praboe Wisakarma）の子供である。アレンカのラフワナは知らないけれど、羅刹は知っている。アレンカ国へ行きたければ、目をつぶれ。直ぐにそこへ行けるとサジュムプラバが教える。全員目をつぶる。再び目を開けると、4人は見知らぬ土地にいる。全員が方角感覚を失い東西が分らない。それまでははっきり見えていたものも形が変っている。

途方に暮れた4人の前に、ジャタユの弟スムパティ（Sempati）が現れる。私の名前はスムパティ。ジャタユは私の兄だ。スムパティは、サジュムプラバの魔法が解けるよう協力する。アノマンが語る。我々はラマデワの命令でアレンカへ行くところだ。ラマの妃がラフワナによってそこへ誘拐された。スムパティが述べる。私は年とっており、体も不自由だ。アレンカへ行くのであれば南へ向えと教える。南へ向えば、高い山がある。山頂には黄金の建築物がある。それはロカパラ王国にプラブ・ウィスラワナが建てたものだが、ウィスラワナの死後、ラワ

ナの手でアレンカへ移築された。だから、本来アレンカのものではない。

4人はマヘンドラ山に行く。山麓には波が打ち寄せている。アンガダが、アノマンに命じる。アレンカへ行け。我々はここで待つ。アノマンは一人、アレンカに向う。まるで白いガルーダのように素早く空中を飛翔する。途中、女羅刹タケキニ（Takekini）に出会う。羅刹はアノマンを追い掛けて飲み込む。怒ったアノマンは羅刹の腸をずたずたに切断する。羅刹は絶命して、海中に没する。アノマン、マヘナ島で山を見かける。島が言う。ようこそ、歓迎します。私があなたを歓迎するのは、あなたがラマの部下だからだ。私は、ラフワナが嫌いだ。ここには、アレカナットも甘いシトロンもあるよ。アノマンは不審に思う。なぜ人間の声がするのか、この山には動物の姿もない。私の目的はアレンカへ行く事だ。先が長い。さようなら。アノマンは、山の勧誘を断る。

アノマンは、ウイ・カタクシニ（Wikataksini）と言う羅刹に飲み込まれる。アノマンはカタクシニの喉に爪を立てる。カタクシニは喉を掻き切られて死ぬ。アノマン、スウエラ山に到着する。山頂がきらきら輝いている。行ってみると、沢山の羅刹がいる。アノマン、夜半まで身を隠す。夜になる。アノマン、シンタ捜索を開始する。建物の中を次々に見て回るが、シンタは見付からない。疲れたアノマン、眠くなる。

シンタは、悲嘆に暮れている。1羽の鳥が現れ、シンタに告げる。心配ご無用。今に助けが来ます。シンタの前に突然ラフワナが現れる。ラフワナ、妃になるようシンタを口説く。シンタ、これを拒否する。ラフワナが引揚げた後、アノマンが歌を歌う。内容はラマの人生。シンタがいなくなった後の物語。シンタ、聞いて驚く。アノマン、姿を現し、ラマに託された指環を渡す。

シンタは手紙と髪飾りとをアノマンに託す。シンタと別れたアノマン、暴れ回り、大勢の羅刹を殺す。猿が暴れている。羅刹を多勢殺したと言う報告がラフワナの元に届く。ラフワナ、息子サクサデワ（Saksadewa）を派遣する。猿を捕獲せよ。現場に赴いたサクサデワ、アノマンに殺される。報せを聞いたラフワナ、激怒する。息子インドラジトにアノマン捕獲を命じる。

インドラジット、アノマン目掛けて矢を射る。それは、神も恐れるナガパサ（Nagapasa）である。ナガパサはアノマンの腰に命中する。アノマン、抜き取

る事ができない。捕縛されたアノマン、ラフワナの面前に連行される。アノマン、ラフワナの素行を非難する。腰抜けだと侮辱する。激昂したラフワナ、ラマの悪口を言う。アノマンとラフワナとの非難の応酬が続く。アノマン、縄でぐるぐる巻きに縛られ、火を点けられる。風の神の協力で、火は瞬く間にアレンカ市街に拡がる。アレンカ市街、炎上。アノマンは無事に脱出。シンタに挨拶した後、ラマの元に戻り、経過報告を行なう。

第3部「ラマ・タムバク」

アンガダ等猿仲間と共にラマの元へ帰ったアノマンは、シンタにことずかった髪飾りと手紙とをラマに渡す。手紙を読んだラマ、涙を流す。涙で手紙が読めない。アノマンがシンタの現況を説明する。

ラマ一行、アレンカに向って出発の準備をする。ラマは余り気が進まない。戦争になれば勝敗は分らない。もし敗北すれば、多勢の猿達が死ぬ事になる。キスケンダとアレンカとの境界で、ラマは祈祷をする。

出発した行列は、先頭に二人、中央に多数の戦士、殿に4人の陣容である。途中、羅刹に会う。掴まえた羅刹を処刑しようとする。スグリワが言う。この羅刹は田舎者の羅刹だ。我々の戦闘相手の羅刹ではない。そう言って釈放する。ラマはスグリワの人柄に感心する。

アレンカでは、ウィヴィサナがラフワナに進言する。戦争は避けた方がよい。そのためにはシンタをラマに返還しなされ。ラフワナ、立腹する。ウィビサナ、落胆して生母に会いに行く。猿軍団はマヘンドラ山に到着する。ラマがアレンカ攻撃に乗出したとの情報が各地に拡がる。アレンカの羅刹達は迎撃体制を組む。

ウィビサナの母がウィビサナに言う。私はアレンカの滅亡を危惧している。もう一度、ラフワナに忠告しなされ。ラマと和議を結ぶように。以前、ラマの代理が一人、アレンカに来た事がある。そのたった一人の使節の手で、アレンカは灰になった。バタラ・ラマは超能力を持つ特別な人だ。世界を保護する目的でこの世に生れ替わってきた。ラマはウィスヌの化身だ。だから、今許しを乞えば、きっと許してくれる筈だ。ウィビサナ、再度ラフワナの所に行く。ラフワナは作戦会議の最中。ラフワナはラマを非難攻撃する。出席している羅刹達、ラフワナの演

説に拍手する。ウィビサナが発言する。我々は、自分達の力を知るべきだ。アレンカはたった一匹の猿のために壊滅状態になった。羅刹達が頷く。

しかし、ラフワナは怒り出す。ラマは我々を攻撃に来たのだ。降りかかる火の粉は払わねばならぬ。ウィビサナが重ねて言う。シンタをラマに返しなさい。女一人のために二つの国が戦争をするなんて愚の骨頂だ。戦になれば多くの命が失われる。猿の司令官スグリワと言えば、我々と兄弟も同然だ。彼は我々と同じ師から学んだのだから。敵に回してはいけない。ソバリの子アンガダを養子にしなさい。戦争になればアレンカは滅亡する。一体誰が我々を救ってくれると言うのか。神々とて我々を助けてはくれまい。唯一つ残された道は、ラマの許しを仰ぐ事だ。それ以外に無い。昔、カシプと言う名前の羅刹がいた。比類無き力の持主であった。神々が困り果てていた時、ウィスヌが獅子になってカシプを襲った。カシプでさえバタラ・ナラシンハすなわちウィスヌの手で殺されたのだ。

ラフワナの祖父ソマリがウィビサナの意見を支持する。ウィビサナの次兄クムバカルナも弟の意見に同意する。しかし、ラフワナは受け入れない。クムバカルナは座を立って寝に帰る。ラフワナはウィビサナに怒りをぶつける。

ウィビサナはアレンカから追放される。ラマ、アノマン、スグリワの3人が話し合っている。誰かが言う。上空に羅刹がいる。怪しい。直ちに調べろ。アノマンが空中に飛び上がる。羅刹はほかならぬウィビサナ。事情を聞いたアノマン、ウィビサナをラマの所に案内する。説明を受けたラマ、ウィビサナと友好を結ぶ。

目の前に海が横たわっている。アレンカへ行くには、海を渡らなければならない。渡る方法がない。ラマは海に怒りをぶつける。ブラフマストラの矢を海に射込む。海が荒れる。海神バルナ（Baroena）が現れる。怒りを鎮めてくれるようラマに懇請する。ラマ、気持を鎮める。アレンカへ渡れるよう、海水を取り除く工夫をスグリワに命じる。

海が割れ、海底が現われる。猿軍団はアレンカに向う。アレンカでは、ラフワナが危惧している。敵が攻めてくる。何か対策を講じなければ。ラフワナは人間の首を二つ用意する。ラマとラスマナの贋首である。ラフワナはそれをシンタに見せる。そうすれば、シンタはラマが死んだものと思い、自分の言う事を聞くに違いない。

シンタはラフワナの要求を拒絶する。死んでもラフワナの言う通りにはならない。もう我慢ならない。そなたの顔は見るのも嫌だ。私を殺しなさい。早く殺しなさい。ラフワナ、怒って帰る。嘆き悲しむシンタにトリジャタが真相を告げる。

トリジャタが父ウィビサナに会いに行く。ラフワナの計略をウィビサナに伝えて、シンタの所に戻る。シンタはラマに再会できるよう祈祷する。シンタは予感を覚える。望みは遠からず適えられる。

ラフワナは部下の一人ソカサラナ（Sokasarana）に、スウェラ山に行って敵情を探れと命じる。猿に変身したソカサラナ、猿軍団の中に潜入する。しかし、ウィビサナに見付かり、逮捕される。処刑されかけたソカサラナをラマが釈放する。自分の意思ではなく命令で来ただけだから。アレンカに戻ったソカサラナが、ラフワナに報告する。シンタはラマに返すべきだ。それがあなたの身のためだと進言する。ラフワナ、立腹する。

ラマはアンガダを使節としてラフワナの所へ派遣する。和平か抗戦か、ラフワナに二者択一を迫る。ラフワナの面前に現れたアンガダ、自分の名前はアンガダ。ソバリの子供だと自己紹介した後、両手を腰に当て、立ったままで最後通告を伝える。戦争をしたいか、それとも話し合いをしたいか、話し合いをしたいのであれば、まずラマに降伏してシンタを返せ。そうすれば話し合いになる。ラフワナ、激怒する。スウェラ山に戻ったアンガダ、ラフワナの返事をラマに伝える。ラマ、戦闘体制に入る。

猿軍団、羅刹軍団双方の戦闘準備。アレンカの羅刹達は皇太子インドラジトを中心に、宰相プラハスタ、ガトダラ、スクワルサ、ミントラグナ、ドゥムラクサ、プラジョンガ、プタダクン、カムパナ、バジュラムスティ等が勢揃いする。スウェラ山のラマ陣営では、ラマを中心に、ウィビサナ、スグリワ、ラスマナ等が手筈を整える。

準備が整う。猿軍団がアレンカ城を包囲する。

第4部「ラマ・ユダ」

戦闘開始。猿軍団はスグリワ司令官の元にアンガダ、アノマン、アニラ、アナラ等の武将が出陣する。猿軍団、羅刹軍団の双方に死体の山が築かれる。武将同

志の一騎打ちも始まる。サンパティとプラジョンガ、アナラとプタダクシ、アノマンとジャンブマングリ、いずれも羅刹側の武将が敗北する。武将同志の一騎打ちが続く。ウィビサナとミントラグナ、スグリワとプラゴンサ、ハリムンダとバジュラムスティ、スグリワとハニプラバ、ラスマナとウイルパクサ、すべて猿側の勝利となる。猿側の戦死者には武将はいない。アンガダとインドラジットが対戦する。インドラジット、形勢不利となり逃走する。

インドラジット、蛇の矢ナガパサを携えて戦場に現れる。ラマ、ラスマナ共に、ナガパサの犠牲となる。蛇の矢に絡まり、気を失い、地上に倒れる。全く動けない。インドラジットは結果をダサムカに報告する。ラフワナ、跳び上がって喜ぶ。早速、祝賀の宴を催す。シンタを戦場に連れ出し、倒れているラマ、ラスマナの姿を見せる。シンタ、気を失う。ラマが死んだ以上、私も生きてはいない。シンタの言葉を聞いたトリジャタが言う。ラマ兄弟は死んだとは限らない。トリジャタは父ウィビサナに会いに行く。ウィビサナが語る。ラマが死んだかどうかはまだ分らない。只、ラマは死んだ方がよい。ラマが死ねば普通の人間だと言う事が判明する。神様もわざとラマを死なせたのだ。トリジャタ、シンタの所に戻る。不意に風が吹いてくる。ガルーダによって起こされた風だ。蛇の矢はガルーダの風で消滅する。ラマ、意識を取り戻す。神々、それを知って安堵する。ウィビサナも、アンガダも喜ぶ。猿の戦士達、悲しみから解放される。

ラマの無事を神々、祝福する。ラマは次の時代には生れ変わって、クレスナ (Kresna) という名の王になる。そしてアスティナパティ国のクルパティ (Koeroepati) 即ち羅刹が入魂したスユダナ (Soejoedana) の率いるコラワを征伐に出掛ける。コラワは全滅する。

ラマの蘇生を聞いたラフワナ、驚く。アノマンとドゥムラクサ、戦う。後者戦死。ラフワナはカンパナを出陣させる。カンパナもアノマンの手に倒れる。ラフワナ、それを悲しむ。ラフワナは、宰相プラハスタを呼ぶ。プラハスタは、年を取っているが、敢然として戦場に赴く。だが、死を予感する。スグリワはアニラにプラハスタとの戦闘を命じる。プラハスタは一旦退却するが再び戦場に戻って来る。プラハスタ、アニラに敗れる。報告を聞いたラフワナ、涙を流す。睡眠中の弟クムバカルナを起せと命じる。

クムバカルナを起すのは大変。なかなか目を覚まさない。やっと目を開ける。なぜ起したのかと機嫌が悪い。羅刹達、事情を説明し、飯、魚、焼いた象の子、酒、蜂蜜など山のような御馳走を用意する。それらをたらふく食らったクムバカルナ、ラフワナに会う。ラフワナに会ったクムバカルナ、戦争になったそもそもの原因は一人の女性だ。ウィビサナの意見が正しかったとラフワナを批判する。クムバカルナの話にラフワナ、立腹する。クムバカルナに命じる。行って戦え。クムバカルナ、立ち上がる。準備を整えたものの、気は進まない。戦場に出る。直ぐに猿達に取り囲まれる。
大車輪のようなクムバカルナの活躍で、猿達が次々に倒れる。生き残った猿は逃げ去る。アンガダが制止する。何故逃げるのか、逃げてはならぬ。逃走した猿達、戦場へ引き返す。しかし、クムバカルナは無敵だ。ウィビサナ、ラマに会って説明する。相手はクムバカルナだ。このままでは猿軍が全滅する。スグリワがクムバカルナと戦う。クムバカルナが漏らす。そなたは立派な主君を持って幸せだ。私はそなたが羨ましい。私は本当は戦いたくないのだが、命令だから仕方がない。ラマとラスマナの二人が、同時に矢を射る。矢はクンバカルナの上半身に命中。次の矢は下半身に命中。ついで足に命中。かくて、クンバカルナ、死を遂げる。

ラフワナはクムバカルナの戦死の知らせを受けて悲しむ。ラフワナの息子、トリシラ、ナランタカ、デワンタカ、トリカヤの4人がラフワナを慰める。僕達がこれから出陣する。しかし、その4人も戦死する。ラフワナは悲嘆に沈む。インドラジットを呼んで、ラマと戦えと命じる。出陣したインドラジット、催眠の呪文を唱える。猿軍団は全員が深い眠りに陥る。インドラジットはウィビサナに見付からないよう戦場を抜け出す。ウィビサナだけはインドラジットの催眠にかからない。戦場を離脱したインドラジット、ラフワナに戦果を報告する。ウィビサナが目を覚ます。全員を起して回る。目を覚ました猿達、驚く。ラマはアノマンに指示する。直ちにマリヤワン（Maliawan）山に向え。そこに生えているマオサデイ（Maosadi）と言う薬草を持ち帰れ。私がかつてマギリの丘に植えたものだ。見分けがつきにくいが、そなたなら捜し出せよう。アノマン、空中を飛んでマリヤワン山に向う。しかし、薬草の見分けができない。アノマンは薬草が生えていると思われるマギリの丘を持ち上げて運ぶ。アノマンが持ち帰った薬草で、

猿達全員が覚醒する。死んでいた猿の戦士達も蘇生する。

猿軍団、アレンカを攻め、焼き払う。ラフワナもインドラジットも驚く。クムバカルナの息子二人クンバクンバ（Koemba koemba）とアスワニクンバ（Aswanikoemba）の二人を出陣させる。猿戦士達が多数死ぬ。アンガダに出陣命令が下る。クムバカルナの息子二人はスグリワとアノマンに殺される。報告を聞いたラフワナ、若い甥二人の死を悲しむ。

インドラジットが慰める。自分が出陣すると告げて戦場に赴く。インドラジットには７人の妻がいる。その７人を連れて出陣する。インドラジット、戦死する。その妻７人全員も戦場で死を遂げる。インドラジット一族の死を聞いたラフワナ、悲嘆にくれる。クムバカルナはラマに殺された。クンバクンバはスグリワに、アスワニクンバはアノマンに、プラハスタはアニラに、そしてミントラグナはウィビサナに、それぞれ殺された。

トリジャタがシンタに戦況を伝える。ラフワナは祈祷を始める。羅刹の行者が多勢現われ、ラフワナに告げる。心配御無用。戦争には必ず勝つ。翌日、ラフワナ、戦場に出る。

第５部　ラマ・コンドウル

猿軍団と羅刹軍団との激しい戦闘が続く。羅刹達は、アノマンの手で殺される。羅刹の武将ウィロヒタクサ、ガトダラ、マホダラ等は、スグリワの手で戦死する。スリ・ラマとラフワナとが対戦する。ラマは右にラスマナ、左にウィビサナを伴っている。ラフワナは、矢を放って、犀、野牛、獅子、虎、猪、象、熊、蛇、龍等、様々な猛獣を創り出す。それらの猛獣を、ラマが次々に殺す。ダサムカ、今度は火の矢を放つ。猿の戦士達、恐怖の余り逃げ出す。ラマが矢を放ち、雨風を起して消火する。ラフワナ、次いで石の山を作り出す。猿戦士達を押し潰すためである。天地が俄かに暗くなる。ラマはその石山にすかさずガンダルワ・アストラの矢を射込んで粉砕する。

ダサムカの乗った車をラスマナが射る。ダサムカは車を乗り換える。ラフワナの矢がラスマナの胸に命中する。ラスマナ、地上に倒れる。ウィビサナが駆け寄り、素早く矢を引き抜く。ラスマナの意識が戻って立ち上がる。ラマ、驚き、喜

ぶ。猿の戦士達も勇気づく。ラマはアノマンに薬草マオサデイを採って来るよう指示する。薬草によって猿の死者達が蘇る。

ラフワナ、別の車に乗り込んで、出直す。ラマは神に授かった車に乗り、シヴァ神に授かった矢グアウィジャヤ（Goeawidjaya）を射る。ラフワナも矢を射返す。双方、猛烈な弓矢の合戦となる。何万と言う矢が飛び交う。すべて空中で交錯して地上には落ちない。ラフワナの弓からは色々な形の矢が飛び出す。ラフワナ、ディヴィヤの矢を射る。蛇や龍が現れる。

ラマの矢がラフワナの頭に当る。ラフワナ、倒れて痙攣する。倒れたラフワナを見て死んだものと思い、御者が馬車から飛び下りて逃げ出す。ラフワナ、起き上がり、大声で御者を呼ぶ。ラフワナは思う。次には自分は死ぬ事になるだろう。ラマがブラフマ・アストラの矢を射る。ラフワナ、激怒する。ラフワナ、色々な猛獣を創出するためディヴィヤの矢を射る。沢山のガルーダが現れる。ラフワナが創り出した猛獣達は全滅する。ラマ、神に授かった車に乗り込み、神授の矢グワウィジャヤを射る。矢はラフワナの喉に命中する。喉が裂け、十個の頭も同時に切断される。ラフワナの体、地上に倒れ、死が訪れる。ラフワナの死を知って、キスキンダの猿戦士達は全員喜ぶ。

兄の死を弟ウィビサナは悼み悲しむ。シンタをラマに返すように、ラマと和睦を結ぶようにとあれ程進言したのに、兄は聞き入れてくれなかった。なぜ聞いてくれなかったのか。私の進言を聞き入れてくれていたら、こんな目に遭わなくて済んだのに。ウィビサナの嘆きは深い。スグリワやアノマンはウィビサナが哀れで仕方がない。ラマがウィビサナを慰める。ダサムカは天国に入る。王が戦場で死ねば、行く所は１箇所しかない。それは天国だ。ダサムカは激情家だったが、性格は純真だった。ほかの人は死んでも、自分だけ助かればよいと言う利己的な所は一つもなかった。勝利のみを期待していた。死ぬ時は皆と一緒に死ぬ事を望んでいた。偉大な王だった。

ウィビサナは気が付く。ラフワナの亡骸を荼毘に付す。ウィビサナはラフワナ無き後のアレンカの王になる。ラマはウィビサナに優れた王になるよう、八体の神々のようになるよう述べる。それらの神々とは、バタラ・エンドラ、バタラ・スルヤシンギ、バタラ・バユ、デワ・クウエラ、バタラ・バルナ、バタラ・ヤマ、

バタラ・チャンドラ、バタラ・ブラフマの八体である。皆が喜ぶ。自然も慶びに溢れる。猿と羅刹とは仲よく暮す事になる。

ラマはウィビサナに話し続ける。シンタの事を忘れているのではないかとウィビサナ、気にする。状況説明のため、アノマンがシンタの所へ行く。ラマがアノマンに指示する。シンタに綺麗にするように伝えよ。アノマン、指示通りに伝える。不審に思いながら、シンタ、水浴をする。二倍も三倍も綺麗になったシンタ、ラマの前に現れる。ラマはシンタに対して冷たい。シンタにはそれが解せない。何故だろう。私は純潔を守り続けたのに。ラマが言う。汝は、ダサムカの所で1年間も過した。貞節を守ったとは信じられない。

シンタに綺麗にせよと言うラマの指示は、シンタに潔く死を選べと言う意味を暗示していた。アノマンはその事が判らず、言われた言葉をそのままシンタに伝えたのである。ラマは言う。余はそなたに再会できて嬉しい。余がダサムカと戦ったのはそなたの為だった。しかし、そなたはほかの男の所に1年間もいた。汚わしい。死ななければならない。

トリジャタが抗議する。シンタは今まで一度として純潔を汚した事は無い。彼女は貞節を守り通した。アレンカでは食べ物も拒否し、水浴びさえしなかった。それなのに、何故あなたはシンタに死を命じるのか。

屈辱を覚えたシンタ、生きる望みを失う。夫に対する自分の貞節は、神のみぞ知る。ラスマナが薪を用意する。ウィビサナが羅刹達に火を用意させる。燃え上がる炎の中に、シンタ、跳び込む。私は純潔です。もし私が一度でもほかの男に心を移すような事があったなら、私は焼け死ぬ。しかし、私が無実であれば、焼け死ぬ事はない。見守っていた猿や羅刹達は涙を流す。

炎の中にバタラ・ブラフマがいる。ブラフマは金の玉座に座って、シンタを迎え入れる。天界から神々が降下する。ラマの父ダサラタも降下する。ブラフマがラマに告げる。これでシンタの言う事が真実だと判ったであろう。シンタを返そう。神々も天界へ戻って行く。

ラマはジョヤパラに戻る事にする。アノマンを先遣として派遣する。アノマンは、それまでラマが通った所を逆に辿ってジョヤパラに向う。ジョヤパラに到着したアノマン、自己紹介をした後、ラマとラフワナとの戦闘の経過を語る。バラ

タはラマの帰還を受け入れる準備を始める。ラマとシンタがジョヤパラに向って出発する。

バラタもラマの母親達もジョヤパラの人々も、慶んで祝賀会を開く。ラマ一行、ジョヤパラに戻る。ラマは弟3人に説教する。スグリワ率いる猿軍団はキスケンダに引き揚げる。ラマとシンタは、ジョヤパラを統治する。

2　ラーマ物語としてのバタラ・ラマの特徴

スンダ語版ラーマ物語を、ヴァールミーキ版ラーマーヤナ、ジャワ版ラマヤナ・カカウィン（以下、カカウィンと略称）およびスナルディのインドネシア語版等と比較した場合次のような顕著な特徴が見られる。

(1)ウッタラ・カーンダの欠如、(2)カカウィンとの構成面での一致、(3)天界の聖者ウィスラワとアルンカ国王ソマリの娘スケシとの間に生れたとするラーヴァナの系譜、(4)ラーマの前身は「ヴィシュヌの権化」、(5)ラーマに滅ぼされる羅刹タラカーはスンダ語版ではタタカキャ（Tatakakya）、インドネシア語版ではカタカキャ（Kata kakya）、(6)シーターの前身は「ヴィシュヌの妃シュリー」（シンタの前身は、スンダ語版では黒い鳥サワリによって語られる）、(7)弓の競技でラーマは弓をU時形に折り曲げる（ヴァールミーキ版およびカカウィンでは轟音を発して弓が真二つに折れる）、(8)パラシュラーマとジャマダグニとは同一人（ヴァールミーキ版では別人）(9)カイケーイーに対するダシャラタ王の二つの恩賞話の欠如、(10)鼻を捩じり取られれたシュールパナカー（ヴァールミーキ版では耳と鼻とを切り落とされる）、(11)シュールパナカーとカラ、ドウシャナとは夫婦（ヴァールミーキー版では兄と妹）、(12)シーターの身の回りに呪圏は描かれない（スラット・カンダ版やマラヤ版ラーマ物語ヒカヤット・スリ・ラマでは、シンタの身の回りに短剣で呪圏が描かれる）、(13)ジャターユスはガルーダ（Galoedra）（ヴァールミーキ版ではハゲワシの王）。(14)長い腕を持つデイルガバフの前身はバタラ・スリの子（ヴァールミーキ版では怪物カバンダ）、(15)シャバリは人間ではなく黒い鳥（インドネシア語版も同様）、(16)ハヌマンはラトゥ・マスとアンジャニとの間に生れた子供（ヴァールミーキ版では風の神ヴァーユの子供。カカウィンでも同様）、

⒄キシュキンダの洞窟における猿王ヴァーリー（ソバリ）と牡牛の怪物マエサスラとの決闘は語られない)、⒅ラーマに殺されたヴァーリ（ソバリ）の遺児アンガダが、ソバリの死後ラマの養子になる、⒆猿兄弟相互を識別するためスグリーヴァの首に植物の葉を巻き付ける（ヴァールミーキ版でも同様)、⒇洞窟を出たハヌマン達一行がスワヤムプラバーの呪術で、全員が方向感覚を失う（カカウィンでは記憶を喪失)、㉑ハヌマンの行く手を遮るタケキニ（ヴァールミーキ版のスラサー）とウイカタクシニ（ヴァールミーキ版のシムヒカー）は共に羅刹で、前者はハヌマンに内臓を切断され、後者は　喉を掻き切られて死ぬ（スラサーは、カカウィン版ではダキニ、インドネシア語版ではタテキニと呼ばれ、シムヒカーはカカウィン版でウイカタークシニー、インドネシア語版ではウイルカタクシニ(Wilkataksini）と表現される)、㉒ハヌマンはシーターに託された髪飾りと手紙とを持ち帰る（カカウィン版でも同様、但しヴァールミーキ版にはない)、㉓兄ラーヴァナにシーターの返還とラーマとの和平を進言するヴィビーシャナが、ヒランヤ・カシプの破滅話（インド版ラーマーヤナの中では唯一カンパン版だけに見られる挿話）を引用する、㉔火の神判でシーターを保護するのは火の神アグニではなくバタラ・ブラフマー（ヴァールミーキ版では火の神アグニ、カカウィンではバタラ・バーニ)。

3　スンダ語版独自のエピソード

バタラ・ラマは、前述のように、全体の構成、各エピソード相互間の繋がり等から見て、ジャワのラマヤナ・カカウィンとその内容が殆ど同じであると言ってよい。しかし、次のようにスンダ語版独自のエピソードもない訳ではない。
(1)ヴィビーシャナは羅刹ではなく人間として誕生する（ラフワナ、クムバカルナ、サルパカナカの３人は羅刹として出生)、(2)ラーヴァナの頭は怒った時にのみ10個に増える、(3)羅刹タータカー退治のためラーマ兄弟を連れ去ったのはヨギスタラおよびミントラという行者二人（ヴァールミーキ版でもラマヤナ・カカウィンでもヴィシュヴァーミトラのみ)、(4)弓の競技即ちシーターの婿選びをラーマに伝えたのはラマの父のダシャラタ王（ヴァールミーキ版とカカウィンではヴィシュ

ヴァーミトラ)、(5)ラマ、ラスマナ兄弟はその美貌ゆえに愛の神カマジャヤとアスマラの化身だと民衆に噂される、(6)ラーマは弟バラタに草履を与えない（ヴァールミーキ版では、兄が履いていた草履をバラタが貰い、それをアヨーダヤーへ持ち帰る)、(7)インドラジットの蛇の投げ縄で瀕死の重傷を負ったラーマ兄弟の命を救うためにハヌマンが山から持ち帰った薬草（マオスサディラタまたはにマオサディ）は、ラーマがカネカプトラ神に指示されて植え付けておいたもの、(8)シーターに会う前ラーマの行動を歌にしてシーターに聞かせたハヌマン、(9)進軍途中に捕えたラーヴァナとは無縁の羅刹をスグリーヴァが釈放、(10)ラーマが射込んだ矢のせいで、海が割れ海底が出現する、(11)猿軍団の偵察にラーヴァナが派遣したソカサラナは二人ではなく単独の羅刹（ヴァールミーキ版やカカウィン版ではスカとサラナは別個の羅刹)、(12)ラマの未来の生れ変りはクリシュナ、そしてクレパテイ王（ラマの未来の姿はカカウィンでは語られない)、(13)インドラジットと共に討ち死にした7人の妻、(14)羅刹の勝利をラーヴァナに予告する羅刹の行者達。

まとめ

スンダ語版ラーマ物語バタラ・ラマは、全体の構成もエピソードの配列順も、ジャワのラーマーヤナ・カカウィンと全く同じである。スンダ語版ラーマ物語の作成年代は明らかでないが、10世紀前後の作品とされるラーマーヤナ・カカウィンから後世翻訳されたものと見られる。但し、バタラ・ラマに登場する人物の中には、カカウィンとではなくインドネシア語版ラーマーヤナと共通する名前が少なくない。これは、インドネシア語版同様、スンダ語版も影絵（ワヤン）のラーマーヤナと無縁でない事を示す。インドネシア語版ラーマーヤナに見られるエピソードの中には、スラット・カンダと同様のものが数多く見られるが、それらはカカウィンやスンダ語版では全く見られないから、インドネシア語版ラーマ物語はスラット・カンダと密接な繋がりをもっていると考えられる。

注

(1)大阪外国語大学インドネシア語のAjip Rosidi 客員教授の教示による。

(2)R.A.A.Martanagara: Wawatjan Batara Rama. Bale Poestaka Batavia-

centrum 1935.

(3)半月形の武器、サンスクリット語 Archacandra

(4)ラマの追放期間は表示されない

(5)サンスクリット語形 Lokapala

(6)サンスクリット語形 Candrahasa

(7) Pertiwiとは、スンダ語およびインドネシア語で地母神即ち大地を指す。

参考文献

Martanagara, R.A.A. 1935. *Wawatjan Batara Rama*. Bale Poestaka Batavia-Centrum.

Budi Rahayu Tamsyah. 1981. *Kamus Lengkep Sunda-Indonesia, Indonesia-Sunda, Sunda-Sunda*. Pustaka Setia Jakarta.

Satjadibrata. 1981. *Kamus Basa Sunda*. Perpustakaan Perguruan Kementerian Djakarta.

Pratikto, Herman. 1962. *Ramayana,Ditjeritakan Kembali*. Penerbit Widjaya Djakarta.

Santoso, Soewito. 1980. *Ramayana Kakawin*. Institute of Southeast Asian Studies, Singapore and the International Academy of Indian Culture, New Delhi.

Sindhunata. 1983. *Anak Bajang Menggiring Angin*. Penerbit PT Gramedia Jakarta.

Soeharno, A. and Sri Punagi 1981. *Serat Rama Keling*. Departemen Pendidikan dan Kebudayaan. Jakarta.

Sunardi, D.M. 1993. *Ramayana*. Balai Pustaka Jakarta.

Echols, John M. dan Hassan Shadily. 1994. *Kamus Indonesia-Inggris*. Penerbhit PT Gramedia Pustaka Utama. Jakarta.

Juynboll,H.H. 1922-23. *Vertaling van Sarga VII van het Oudjavaansche Ramayana*. BIJDR 78 373-384, 79 569-590.

Juynboll,H.H. 1924-36. *Vertaling van Sarga IX-XXVI van het Oudjavaansche Ramayana*. BIJDR 80,81,82,83,84,85,86,87,88,90,94.

Kern,H. 1917. *Zang I-III, IV-V, VI van't Oudjavaansche Ramayana in Vertaling*. BIJDRAGEN 73 1-29, 155-175, 472-494.

Sarkar, Himansu Bhusan. 1934. *Indian Influences on the Literature of Java and Ba li*. Greater India Society. Calcutta.

Stutterheim, Willem. 1925. *Rama-Legenden* und *Rama-reliefs in Indonesien*. Georg Muller Verlag Munchen.

Zoetmulder, P.J. 1974. *Kalangwan, a survey of old Javanese Literature*. The Hague.

BATARA RAMA—— Ramayana in Sundanese

OHNO Toru

It is generally agreed that Ramayana Kakawin is one of the most popular Ramayana in Indonesia. There is no doubt that Serat Kanda also occupies an outstanding position in performances of Ramayana as shadow play known as Wayang with leather puppets. Both of them are composed not in Indonesian but in Javanese language. It is worthy of note that Serat Rama, Another important version of Ramayana in Indonesia, is written in Javanese, too. It indicates the fact that Javanese language was once and still nowadays is essential as an indispensable media of traditional cultures in Indonesia. It draws our attention, however, to the fact that other indiginous languages such as Sundanese, Balinese and Madurese also play quite significant roles like Javanese in preservation of Indonesian culture.

Recently I had an opportunity to get a valuable information from Mr. Ajip Rosidi, a Visiting Professor to Osaka University of Foreign Studies from Indonesia. There is, according to his information, a Sundanese Ramayana called Batara Rama.Thanks to him and his daughter Ms. Titis Nitiswar, I was able to search for the whole content of Batara Rama and consequently know the order of arrangement and general structure of it. To my regret, however, no special attention seems to have been paid to Batara Rama and accordingly very little is known about it hitherto. It was written by R.A.A. Martanagara and published at Batavia in 1935. It is composed of five chapters, beginning with the birth of Rama and ending with the return of Rama together with Sita to Ayodhya.

It was found that Batara Rama follows basically the story of Valmiki Ramayana. In fact, the plots of Batara Rama are parallell to those of Valmiki Ramayana. It contains the major episodes such as Rama's birth,his

success in archery contest and his marriage with Sita, Rama's banishment to the forest, disfigurement of Surpanakha, Sita's abduction by Ravana, Rama's encounter with Hanuman and Sugriva, destruction of Vali by Rama, Hanuman's interview with Sita, conflagration of Lanka, siege of Lanka, fall of Ravana, Sita's Ordeal by fire, Rama's return to Ayodhya with Sita.

It is to be noted, however, that Batara Rama contains a lot of divergencies in comparison with Valmiki Ramayana. The main deviations of Batara Rama can be pointed out as follows. (1) lack of Uttara Kanda. (2) the description of the birth story of Ravana who was born of Sukesi,the daughter of Somali, to Wisrawa, the divine Saint of Lokapala, can be seen in the beginning chapter. (3) Vibhisana was alone born not in Raksasa form but in a human form. (4) Rama was the incarnation of Visnu and Sita the incarnation of Sri. (5) the sage who demanded Rama to accompany with him is not a single but stated to be two. (6) the bending of Siva's bow by Rama, instead of breaking of it. (7) the mentionning of Parasurama and Jamadagni as a single person. (8) the description of Surpanakha as the common wife of Khara and Dusana. (9) the statement of Jatayu was not as the king of vulture but as the king of Garuda. (10) the description of Dirghabahu with long arms was as a son of Sri. (11) the statement of Shavari is not as the female ascetic but as a black bird. (12) missing of the story of struggle between Vali and buffalo demon in Kiskindha cave. (13) confusion of sense of direction of monkeys by magic power of Svayamprabha. (14) Sita's consignment of her jewel and letter to Hanuman. (15) appearing of a pass-road to Lanka at the bottom of the sea. (16) the episode of Hiranyakasipu' destruction is quoted by Vibhisama at the war council of Raksasas.

It is interesting to note that the general structure and the order of arrangement of Batara Rama are tally with those of Ramayana Kakawin. It is probable that Ramayana Kakawin has played a significant role to

compose Batara Rama. Meanwhile Batara Rama shows not so close affinities with Serat Kanda as Ramayana Kakawin. It is worth mentioning here that Ramayana written Indonesian language such as "*Ramayana Ditjeritakan Kembali*" written by Herman Pratikto (1962) and "*Ramayana*" written by Sunardi (1993) have considerable affinities with Batara Rama in connection with minor anecdotes and episodes. As the Indonesian Ramayana written by Sunardi was evident to have written on the basis of the book entitled "*Serat Padhalangan Ringgit Purwa*" vol.36 and 37, it is necessary to compare the content of Batara Rama with that of *Serat Padhalangan Ringgit Purwa* which was written in Javanese language as a fundamental guide book to Wayang.